

令和5年度 岐阜市立女子短期大学将来構想委員会（第2回）
議事録 概要

- 【日 時】 令和5年8月29日（火）13時30分～15時30分
【場 所】 岐阜市役所6階 6-2会議室
【出席者】 （会場出席）
村井 美代子副委員長、両角 亜希子委員
（オンライン出席）
杉山 誠委員長、木田 竜太郎委員、田丸 敏高委員
（欠席）
石田 達也委員

1 開会

2 議事 ※< >は、説明者

- ◆第1回委員会におけるご意見に関する資料 <事務局>
- ◆三重短期大学について（共学公立短期大学事例紹介）<村井副委員長>
- ◆別学共学を取り巻く環境 <事務局>
- ◆論点案 <事務局>

◆以下、出席者の意見

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ここまでのいろいろな説明があり、議論が難しいところもあると思うが、意見をお願いします。

○事務局（企画部）

- ・本日欠席の石田委員から事前に提出された意見書を読み上げる。
「現在、ジェンダー平等が浸透しつつあり、教育面においても、性別を超えて多様な価値観に触れながら共に学び合う環境が望ましいと考える。また、社会へ出る前段階の教育機関であるため、近い将来、共学化に変更していくことが望ましいと考える。ただし、トイレや更衣室をはじめとする施設設備の新設や改修が必要となることから、今回の論点からは外れるが、共学化は4年制大学への変更の議論とセットで考えていくとよいのではないかと考える。また、今後共学化に向けて動き出すのであれば、教育分野については、既存の学科の再編のみでなく、例えば情報系、IT系といった新しい領域の学科を新設することにより、学校のセールスポイントを明確に打ち出すことも並行して検討する必要があると考える。共学化からは離れるが、最近、他県の県立・市立大学の中には、

所管する自治体が入学料や授業料の無償化の方針を打ち出す例も出始めている。この取組が成功すれば、同じような方針を打ち出す自治体が増えてくるとも予想される。こうした取組の動向も十分に注視する必要があると考える。」石田委員からの事前意見は以上。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ 共学化も時代の流れというご意見だと承知した。
- ・ 他大学への編入学について、村井委員と事務局の畑中岐阜市立女子短期大学（以下「岐女短」という。）学長にお伺いしたい。編入学を希望する学生は、入学時から希望しているのか、それとも、短大で勉強するうちにもう少し深く勉強したいと思うようになり編入学するのか。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・ 編入学を希望する学生の 8 割は最初から編入学を目指している。2～3 割は在学中に学ぶことが面白くなり、編入学を希望するようになったもの。入った学科と違う分野を学びたくなったからというケースもある。この場合、編入学ではなく 1 年生から入り直しになることもある。
- ・ 4 月時点では、高校の人間関係で自分は志望校に落ちたが友達は受かったという理由から、100 名以上の編入学希望者がいる。しかしその後考え直し、就職希望に変わる学生もいる。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ 編入学希望者は男子が多いように思うが。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・ 編入学希望者のうち男子は半数ぐらい。三重短期大学（以下「三重短大」という。）は生活科学科の工学系のコースに力を入れているため、他大学の工学部に入れなかった男子学生が、編入学で 4 年制大学の工学部に進学できると考えて入学することが増えているのかもしれない。ただし、最近はそうした男子学生が就職希望に変わることも増えている。

○事務局（岐女短 畑中 重光 学長）

- ・ 学科によるが、岐女短も三重短大と同じ状況である。国際コミュニケーション学科は最初から編入学を希望している学生が多い。健康栄養学科は、管理栄養士を目指すために編入学を希望する学生が一定数いるが、最初からそのつもりだったのか、在学中に希望するようになったのかについては分析できていない。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ 次回のテーマが4年制ということで、編入学の状況についても伺いました。
- ・ 今回のテーマである別学・共学について、委員からご質問やコメントがあればお願いします。

○委員（両角 亜希子 氏）

- ・ 村井委員にお伺いしたい。三重短大に入学する男子学生が急増している理由は、資料2-1の6・7ページを見る限り、生活科学科の居住環境コースを希望する男子学生の増加による影響が大きいように思うが、その認識でよいか。それ以外にも理由があるのか。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・ その通りである。居住環境コースは、生活科学科の志願者が厳しい状況になりかけた際、受験生の志望する分野に工学系や環境系の生物資源等が多いこと、建築系の就職先が多数あること、地方の公立大学で定員割れしている工学部の状況などを教員が調べ、起死回生をかけて内容を作りこんだ。今年は約半数が男子学生になっており、募集にかなり手をかけた結果が出たのだと思う。

○委員（両角 亜希子 氏）

- ・ 別学・共学を考えるにあたり学科の分野の問題が大きいため、確認させていただいた。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ 共学の短大である三重短大において、男子と女子と一緒に学ぶことは学内でのような影響があるか、村井委員にお伺いしたい。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・ 男子学生が少し増えると、特に広報しなくても噂を聞いて男子の入学者数が増えることがある。
- ・ 食物栄養学科はスポーツ栄養に力を入れている。高校の部活動で食事指導や測定を行う際も、男女一緒に行っている。家政系の学科だが、工学系に女子が進むのと同様に、切り口が異なれば男子が学ぶ分野もある。
- ・ 委員会活動も男女一緒に行っており、女子がリーダーシップをとることも多い。社会に出る手前で実社会と同様に男女と一緒に生活することは、学生にとってよい体験になると感じている。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・ 岐女短は女子ばかりでの生活だが、何か難しさはあるか。

○事務局（岐女短 畑中 重光 学長）

- ・別学・共学に関し、学生が育つ過程における現代の女子短大のメリットは何か、それをどう生かすかという議論を学内でかなり行っており、女性の力を遺憾なく発揮するリーダーを育成する必要性が強く言われている。女子だけのグループでは必ず女子がリーダーになるため、皆がリーダーを経験ができることは女子別学の大きなメリットである。他方、村井委員が仰ったように共学にもメリットがある。
- ・女子教育において、リーダーシップの育成は必ずしなければならない。女子短大として、責任をもってそうした教育をしていこうという議論をしている。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・女子教育の目標がそのようであることは承知した。特に支障は感じていないということではよいか。

○事務局（岐女短 畑中 重光 学長）

- ・これまでの伝統もあり、現段階で女子教育において困っていることはない。
- ・男子学生との関わりは大学外に求めることができると考えており、男子学生を含めた社会との関わりは、教育とは別の形で実現する努力をしている。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・短大は女子別学が多いが、今後はどうなると考えるか木田委員に伺いたい。

○委員（木田 竜太郎 氏）

- ・公立の短大への進学動機として、国公立の大学しか進学先に入らない層が、一定の社会的評価が担保されている公立の短大を、言葉は悪いが「滑り止め」として選んで来る場合がある。これは性別によらない。
- ・最初から編入学を考えて入ってくる学生は、上昇志向が強く、受験時にある程度勉強をしておりポテンシャルが高い傾向にある。こうした学生は、三重短大であれば法経科のような学科で一定の基礎教養を身に着け、4年制大学へ編入学する。ここ 2、30 年で、編入学制度を整備し、一定の学生を確保しようとする戦略をとる国公立大学が増えてきた。編入学は、大学受験のときに手が届かなかった上位の国公立大学へ入ることができる隠れたルートであるため、三重短大や大月短期大学など、編入学に一定の実績がある公立短大はニーズがある。これは次回のテーマに関わる部分なので、次回の論点でまとめていただきたい。
- ・日本の 2 年制大学が事実上女子校になった歴史的経緯は、自身の研究における関心ごとの一つでもある。岐女短が、東海地区初の公立女子専門学校「岐阜女子専門学校」として、旧制専門学校の枠組みで創設された 1946 年頃は、

1945年12月の幣原内閣による女子教育刷新要綱を受け、女子の旧制専門学校が全国各地に急速に誕生した。1950年の学制改革により、短期大学の制度が当初は暫定制度というような形で急遽作られ、前年に共学化した岐女短も同年に共学の短大へ移行している。この頃は、当時で言う「新教育」や「民主的な教育」など、男女共学がこれからのスタンダードになるという考えがあったのだと思う。しかし、1950年代半ばには、現実的には短大への男子の入学者が振るわず、女子教育の方に需要があるようだという高度経済成長期のニーズを反映し、私立を含め、既存の短期大学や高等教育機関を新設する学校法人が一斉に女子短大にかじを切った。以降、そのまま現代へ推移していったという歴史的経緯がある。

- ・高等教育であえて別学を選ぶ積極的な理由について、お茶の水女子大学などは、男性優位社会においてリーダーシップをとることができる女性人材の育成だと長らく言い続けている。戦前は男子別学も多く、大学は男性のものという風潮があったからこそ女子別学の存在意義もあった。しかし、私も含めたこの分野の研究者は、別学と共学の選択肢を残すことも重要だが、国公立の大学・短大を別学とすることに対し納得のいく説明は難しいのではないかと考えている。現状、公立の女子短大も4年制大学も2校ずつしかない。
- ・大学改革は第一に卒業生のためであり、岐女短が伝統的な女子高等教育機関であることに誇りをもっている方々の気持ちを尊重しなければならない。一方で、国公立で別学を選ぶことに納得のいく説明を今後考えるのは難しいのではないか。多くの納得を得て公立女子短大のままでいられればそれに越したことはない。しかし、現状から何かを変えようとするのであれば、様々な要素を納得のいく説明という観点から考えていく必要があるのではないか。
- ・学問領域によってジェンダーの差があるため、共学にすれば必ずしも志望者が増えるわけではない。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・前半のご意見は次回の議論になる。後半のご意見は、お茶の水女子大学のアンケートで、女子大だから選んだわけではないという結果が出ているように、「公立として」という点は一つの大きなキーワードになるかと思う。
- ・両角委員は、今回の資料や現状を踏まえ、どのようなお考えか伺いたい。

○委員（両角 亜希子 氏）

- ・別学・共学はどちらでもやっていくことができる。どちらを選ぶかという選択の問題だと考えている。
- ・日本は「女子大大国」である。日本ほど女子大が多い国は国際的に見てもあまりなく、日本のジェンダーに係る指標が低いことと切り離せない。存続が厳しい学校も出てきているが、それでも多数の女子大が存在する理由は、女性がま

だ厳しい状況にあり、女子別学に一定の意義があるからではないかと思う。

- ・先ほど畑中学長が仰ったように、女子短大だからといって女子だけでしか学べないわけではないし、女子だけで伸び伸びと学ぶ場があるという良さもある。キャリア教育に関して言えば、高校まではリーダー経験の有無が男女で変わらないというのはあるかもしれない。共学の大学を見ても変わらないように思う。様々なデータによると、変わるのは社会に出てからであるため、学校に在る間は「女性だから損をする」ことに気づかない。その点を踏まえ、昭和女子大学は、「とりあえず資格を取っておけばよい」のではなく、職業や生き方の選択、女性のキャリア教育の重要性などを徹底的に教育している。女子大だからこそ、女性ならではのキャリアをきめ細やかに教育できる場所があるため、岐女短が今後も女子別学のままでいくことも可能だと思っている。福岡女子大学は、女子別学でやっていくと決め、女子教育の問題の解決等について国際的な連携も行っている。
- ・女子教育の向上発展は、私自身はまだ十分ではないと思うが、それを建学理念として岐女短が創設された頃から随分状況が変わったことを理由に共学化することは可能だと思う。ただ、せっかく女子教育が建学のベースにあるならば、共学化後もその理念を大切にするとよいのではないか。
- ・木田委員が仰ったように受験生の国公立志向は強いため、地元で共学の公立大学や短大ができれば、地域に対し、男子高校生の進学先を増やすという貢献ができる。
- ・私立ではなく公立なので、別学・共学のどちらでもやれると思う。最終的には選択の問題だと考える。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・女子別学の意義や社会的ニーズ、女子教育の内容という観点について承知した。最後の、時代の流れの中で公立学校がどうあるべきかという観点について、もう少しはっきりとご意見をいただきたい。

○委員（両角 亜希子 氏）

- ・公立であっても別学・共学どちらもあり得る。地域の男子高校生の進学機会を広げるために共学化してもよいし、地方へ行くほど解決すべきジェンダーの問題があると感じるので、地方の公立大学としてそうした問題に取り組むという市のメッセージを発信してもよい。公立だからこうでなければならないということではなく、何を大事にするかで決めることだと思う。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・福山市立大学で共学化を経験された田丸委員のご意見を伺いたい。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・ここまでのお話で、地域において伝統やブランドを築き、岐女短を現在の地位へと育てるには大変な努力や苦労があったことが想像できた。福山市立大学が共学 4 年制大学へ移行した後も、大勢の女子短期大学時代の卒業生が大学を応援してくれている。保育士の養成などで、現場で活躍している卒業生が非常に協力的であり、地域における大学のブランド性が卒業生の自信に繋がっていると実感した。
- ・別学・共学の議論は、女性の社会参画や社会的地位の向上をどう図っていくかが本質であると感じた。女子教育発展の軸の一つに、女性自身や地域の声が上がったことがあると思う。戦前は女性が大学に行くことができず、戦後に現在の有名女子大学が設立されたが、大学のある都市に行くことができる人は限られているため、地域にも様々な大学ができたのではないか。その後、女性は高度経済成長期において、家庭を守ることが重要な役割の一つとして公然と強制されていた一方で、働くことも重要であるとして、家政学と言われる領域にある職業や、看護師や保育士などの限られた職業に就き、家庭と就業とを両立させていた。こうした時代背景の中で、岐女短も現在の地位を築いてきたのだと思う。岐女短の今後のあり方を考えるときに、岐阜という地域において、女性の社会参画や社会的地位の向上がどのように行われ、岐女短がどう寄与したかを考えることが重要だと思う。
- ・別学・共学いずれの場合も学生は全国から集まるので、全国の大学の中から学生がそこで学びたいと思った理由が明確にわかる学校に育てることが大事。その大学を第一志望とする学生が来るのはごく一部の国立大学のみで、地方大学に第一志望の学生が来ることは少ない。地方大学に入る学生は、誰もがある程度の挫折を味わってきていることを念頭に置き、そうした学生に誇りをもたせる教育が必要。また、オープンキャンパスに参加した学生が第一志望として来てくれることもあるので、高校への広報など、取り組むべきことは様々ある。
- ・両角委員が仰ったように、別学・共学は岐女短や岐阜市の選択の問題であり、大学を育てる方向性や、これまで培ったものを支援する方針等の観点から判断する必要がある。共学化と 4 年制化を同時に行った福山市立大学では、受験票が番号で管理されており、受験生の性別は入学してくるまでわからない。学内では、LGBT も含め多様な性の人が、性差をあまり意識せず垣根なく一緒に勉強している。公立である以上、すべての学生を受け入れて一緒に学ぶというのも一つのメッセージであるし、女性の社会進出を支援するために別学とすることも一つの選択である。
- ・福山市に限って言えば共学にして後悔はなく、市への貢献もできたのではないかと感じている。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・別学・共学は地域の考え方次第であるという主張はその通りであると思う。
- ・歴史の中で女子別学は一定の役割を果たした。他方、福山市立大学は多様性を重視して方針を転換しており、岐女短についても、設立当時の背景事情を今に引きずってよいのかという問題がある。
- ・これまでの意見を聴いて、畑中学長はどのようにお考えか。

○事務局（岐女短 畑中 重光 学長）

- ・貴重なご意見に感謝する。ここ 1 年半くらい、岐女短において若い世代を中心に議論を深めてきたが、その結論に近いものを今お聞きできたと思う。
- ・令和 3 年度の「岐阜市立女子短期大学あり方懇談会」の際に行ったアンケートでは、教員 30 人全員が 4 年制化すべきとの意見だった。他方、別学・共学には様々な意見があり、岐阜市や地域のために人材を育成、輩出していくという岐女短の将来の方向性は見えたものの、選択の決め手はなかった。本日、委員の方々から新たな知見をいただき、別学・共学のどちらでも前向きに考えることができるようになった。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・どう選択するかということが本日の結論になろうかと思う。
- ・両角先生が仰った「日本は女子大大国」という言葉が印象的である。女性の社会進出のために女子高等教育を充実させているにもかかわらず、ジェンダーギャップ指数等に結果が表れておらず、女子別学という選択肢はあってもよいが、目的に寄与できているか疑問に思うところがある。別学のあり方について今までの考え方ではいけないということは、他の委員の方々も異論はないと思う。
- ・公立であるため、納税者への説明も大事な観点。私立と異なる点であると思う。

○委員（両角 亜希子 氏）

- ・大学進学率は、先進国では一般的に女性の方が高い。日本は、男女の大学進学率がほぼ同じとはいえ男性の方が高く、実際はまだあまり男女平等ではないのだと思う。
- ・岐女短のあり方について、学内以外のステークホルダーがどのように考えているかが気になる。私立では、卒業生などから意見を聴くことがある。卒業生や地元の人からの要望について、把握されていれば教えていただきたい。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・非常に重要なご指摘だと思う。岐阜市でそうした調査はしているか。

○事務局（企画部 総合政策課大学改革推進室）

- ・市民にそうした調査を行ったことはないが、一昨年、高校生に対して行ったアンケートでは、岐女短が共学化したら受験したいという声があった。ただ、4年制ではなく短大という前提のため、人数は多くなかった。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・岐女短において学生の募集に苦労しているという話を聞くと、実際のところ、女子短大のニーズはかなり弱いのだろうと思う。共学化すると志望者数が少し増える可能性があることについて、畑中学長はどうお考えか。

○事務局（岐女短 畑中 重光 学長）

- ・共学化すると入学対象となる学生は倍に増えるが、必ずしも志望者が増えるわけではないのではないのか。データからもわかるように、学生にとって魅力的な学校になれるかに懸かっていると思う。
- ・先ほど紹介できなかった女子別学のメリットとして、中部地方唯一の公立女子大学として特色を示せるというものがある。これは次回の4年制化の議論ですべき話だが、福岡女子大学、群馬県立女子大学、お茶の水女子大学、奈良女子大学といった国公立女子大学がある中で、中部地方は公立女子大学がないため、女子別学を必要とする人に貢献できる大学になるのではないのか。この意見は、正式な調査ではないが卒業生から聞いたものなので、ステークホルダーの一部からこのような意見があることは理解している。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・別学・共学だけでは論じられないため、次回、4年制化の是非も含めて議論する必要があるというご意見だと承知した。
- ・次回に向けて様々な論点が見えてきたように思うが、村井委員のご意見は。

○副委員長（村井 美代子 氏）

- ・私自身は共学の方がやりやすいと思っており、少しでも早く社会の実情を知るためにも共学がよいと思っていた。三重短大では、ゼミで夫婦別姓等について男女が熱心に議論しており、学生はこうした経験を通じて社会に出る前に男性の考え方を学ぶことができる。また、すべての高校に募集をかけられるため、広報がやりやすいというメリットもある。しかし、皆様のお話を伺って、女性のリーダーシップ教育の重要性や女子別学のメリットも理解した。大事にすべき点だと思うので、次回、4年制のニーズと絡めて議論をしていけるとよい。

○事務局（岐女短 畑中 重光 学長）

- ・先ほどご紹介したのは、あくまでも学内での議論の一部。別学・共学にはいろ

いろな意見があった。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・多様な価値観がある中で人を育てることは重要な視点の一つだと思う。
- ・木田委員、田丸委員からご意見があれば伺いたい。

○委員（田丸 敏高 氏）

- ・福山市は産業が盛んで、世界進出している中小企業などもある。産業界から、そこに寄与する人材を育成してほしいという強い要望があったが、女子短大の学部では担えないため、その要望に応えるために共学 4 年制化するとともに、都市経営学部を新設したという背景がある。
- ・福山市立大学は、広島大学と岡山大学に挟まれている。地域性として高等教育に対する需要が高く、最近は国立大学との競争が若干激しくなっている。公立で共学 4 年制大学の道を選ぶならば、国立大学と競争する覚悟が必要。学生の募集にもかなり力を入れなければならず、研究者としても国立大学と同等の業績を積んでいくなど、伍して戦う覚悟が求められる。非常にやりがいがある仕事だが、学内や地域でよく意思を固めて踏み出す必要があると思う。

○委員（木田 竜太郎 氏）

- ・「選択」というキーワードが出たが、大学側の選択だけではなく、選択される側としての大学の姿も考える必要がある。岐阜市が今後も公立の高等教育機関として大学を設置するのであれば、大学のフィロソフィーは何か、それをどう内外に説明するかを再確認する必要がある。これは、畑中学長が言われる「魅力ある大学づくり」というキーワードにも繋がる。
- ・そもそも、高等教育は性差によって変わるものではない。近年、公立大学は地域シンクタンクと呼ばれることも多いが、本来的には地域性に立脚したものでもないはずである。だからこそ学生が全国から集まる。岐阜市が今後どのような大学にしていきたいかが重要になる。

○委員長（杉山 誠 氏）

- ・岐女短のあり方について、地域がどう考えるのかを我々がキャッチし、答申に活かしていくことになる。そうすると、今あるデータだけでは難しいかもしれないので、少し事務局で考えていただきたい。
- ・事務局から連絡事項があればお願いします。

7 閉会

○事務局（企画部 総合政策課大学改革推進室）

- ・皆様にご指摘いただいたとおり、個別の論点だけでなく、それらを重ねて全体

としてどのようなあり方を目指すかが重要だと思う。指摘事項を整理し、必要な情報を集めるなど次回に向けて準備を進めたい。

- 次回会議は10月開催予定。日程調整をさせていただくので、よろしくお願いします。